

「岩手・宮城内陸地震に思う」

県土整備部 道路都市担当技監 平井 節生



6月14日午前8時43分に発生した岩手・宮城内陸地震により、多くの方々が被災し、また、県土に大きな傷跡が残っていることに心を痛める次第です。

私事で恐縮ですが、20年あまりの職歴の中で、今回が最も大きな災害です。ただ、過去にも、例えば平成16年の台風被害等数回の災害の現場で仕事をさせて頂きました。そのたびに思うことですが、私たちの仲間(国土、県土整備の仕事に携わる方々)の意識の高さです。発災当初の迅速な行動、体制の構築、発災現場での果敢な行動、技術的な知見の共有等々にそれが現れています。

このことは、危機管理対応マニュアルがあるからとか、あるいはそうしなければマスコミにたたかれるからというだけで維持されている美点ではなく、災害が起きたときに先輩がどのように行動するか、若い人が見ていると伝承されているものだと思います。

職場ではなく、生活の場であるコミュニティの中ではどうでしょうか。今回の災害でも、ボランティアで、被災した方々の物質的、精神的な支えになった方々がたくさんいらっしゃいます。日本のコミュニティの中では、いざというときに隣人を助ける利他的な援助行動が受け継がれているという説を唱える学者もいらっしゃいます。

私は、このことが廃れていかに祈るばかりです。高齢化等を原因として、特に小さなコミュニティの崩壊の危機が忍び寄っています。小さなコミュニティの維持にはコストがかかるからと言ってその集約化等を図ろうとする議論がありますが、その

ような議論の過程で、コミュニティの中の見えない連携の価値を無視するべきではありません。

再び私事で恐縮ですが、私は岩手に住むのは初めてで、4月に現職に就いて以来、今回被災した地域を数回ドライブし、その美しさに感心していたところです。特に、初春の頃の須川の木々の色、石淵ダム上流に入っていた時の新緑の美しさ、一関市平野部の鮮烈な緑色を呈する水田の風景等が印象に残っています。

今回の地震により、この美しい地域の一部が毀損させられてしまったわけです。そのことは、土木被害額約170億といった数字では表現できない重みを持ちます。

例えば、国道342号の須川付近は、昭和30年代に難工事の未開通されたもので、線形は厳しいのですが、自分の運転で須川の奥まで入って行って自然を堪能できるありがたさを考えると、その価値は計り知れないものがあります。

今私たちが取り組んでいる仕事はこの地域の美しさ、地味の豊かさを、先人たちが誰にでもアクセスできるようにしてくれた、その財産を取り戻す仕事でもあると思います。

今後とも、県土整備部及び地方振興局土木部は、一丸となって、災害復旧・復興に取り組んで参ります。